



喫茶指掌編

月之部
中

多
628
2



門 7 9
號 628
卷 2



喫茶茶抄卷第二目錄

後西院帝 御茶の事

利休古訓の茶意を月利の事

利休小田原にて煎山竹を以て花入を切る事

竹ふ入の始り事

或人の茶に答附 煎山竹ふ入の事

一篇切の儀

久須良所持二重切の事

宗旦花入蒔絵の事

説

説

説

或人の説

茶支譚の文

摩訶宗花の入始の事

女阿母宗花尺八の並角の事

宗旦寺禪の二重切の事

仙史窓の二重切の事

宗旦素角の詠の事

仙史篋角の事

福家花入の事

川上ふ白並角の事

仙史螺の釣ふ入の事

きりぎり花入の並板の詠の事

説

説

説

説

説

説

説

説

説

依久間板座ふ入を並設の事

利休花の生返れ事

紹智所持始ふ入の事

或々の類

花入貴覧の茶の事

古漱ふ入貴覧の茶の事

或ふ入貴覧の茶の事 二ヶ条

ふ入花よ依て定る事

細口ふ入の事

古銅花入の事

説

説

説

説

説

説

説

説

説

説

名物ふ入る花を入る事

説

廣口花入る切入をいふ事

説

狭口有名物ふ入る茶の事

説

或茶の湯ふ入破落る事

説

籠ふ入の如の事

説

利休籠ふ入る事出はる事

説

義政の壺撥をぬ事附和歌

説

古田籠ふ入る事用る事

説

宗和ふくへふ入の如の事

説

宗和井並ふ入の事

説

桃底ふ入の事

説

宗和細口花入者板の事

説

利休瓢箪ふ入の事

説

或まの如

説

利休瓢箪ふ入の如の事

説

宗和瓢花入程子の事

説

或くも瓢ふ入の如の事

説

瓢花入用る時節の事

説

藤井何未口切の茶の事

説

紹隆利休ふ入是と同一の事

説

耳記の事

利休公入掛訂寸法を定まる

説

又説

床掛公入掛訂の事

説

又隅釘の事

床の公入掛の訂の事

又言有好小生安と云掛釘の事

福島丸湯の路地を縁の茶をわする事

説

又言女名月の茶の事

説

土を改直上女名吹を茶に招する

説

堀田正陳侯之者に書字を写す

説

利休善書け説

説

織田貞朝連福の茶の事

説

敷内紹智連福の茶の事

説

或人海庵の万物一致の理を事

説

或人茶を五行配書かす事

説

土托二三陰通け事

説

或人茶人の一流と云事

説

茶様一味と云事

説

数寄の妙と云事

説

古田織部通り物名を言ふ事

仙波道は物名を言ふ事

喜多道々の新古價の程を言ふ事

小山宗二古人を言ふ事

利休毒子の茶の記

利休生涯の茶の事

珠光自分の数寄を言ふ事

利休松平の茶賞歌の事

佐之曾利休茶抄歌の事

利休茶の表替抄

説

説

説

説

説

説

説

説

説

説

利休茶の局の粗致二言^附古人の程

利休小室教^二緋色を纏^一事

少庵道と物名の記

説

説

説

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

喫茶指掌編卷第二

平安述水宗道著

男宗暎校訂

後西院帝の御茶の御申起は侍合にて之善提院殿大將殿

に侍りて今日迄て毎のふ生は出づる有と云はるは此茶に

より造りし大將もは終る有と云はる

安茶の撰記は云ふに之善提院の南敷一乘院宮直殿

親王より大將の近衛後樂院殿下家惣と云ふ事あり

未熟なりと云ふ事あり在りては人爲りたる事あり

儲て器々貯りて之を以て其の親王以上御靈(法皇)の時
時権井宮の法門前を法通りの折立法内の人舟
の花生を結て是早よりも法皇にて其の貯りたる
貯摺記をこの世ともしかたるる事あり事や

利休之故(り)茶話敷刻ちり夕暮るまで古銅の茶筒を以
て之を以て利休えり日本物たるや又焼を取えり
いふも唐物たるや今一度之れを利休たる物の不考
をかる事いなり之物の没唐物より日本物と考たる
とらるる事日本物よりも倍々善い唐物は儲りたる事
味ちる指かりたる物の事いふ事ありや之を以て

変形(の)建(物)の(一)部(は)ふ(は)い(ふ)如(か)た(り)其(の)
目利(の)と(も)あり

豊(彦)於(下)小(回)系(法)法(中)にての法(茶)の(時)利(休)同(國)遊(山)の
作(を)以(取)敢(以)一(重)切(の)花(筒)を(以)て(之)を(以)て(法)茶(を)
に(や)法(茶)一(投)換(る)事(や)

此(系)尚(業)作(て)ま(り)し(る)事(は)又(其)付(の)法(茶)の(取)り(ま)し(る)
意(を)以(て)ま(り)故(に)ま(り)し(る)事(は)不(知)ま(り)し(る)法(茶)の(何)時
も(法)茶(を)ま(り)し(る)事(は)不(知)ま(り)し(る)に(其)付(の)法(茶)は
京(吸)付(し)し(る)事(は)京(久)京(吸)の(各)人(に)兼(て)其(利)休(は)
い(ふ)事(は)や(其)意(の)數(を)系(法)附(録)は(其)を(以)て(は)せ(は)

法陣の及き程蒙法初集しんもまをたれん
たれはるもろく一掃のあまのまのしん
一と案とさう

は並山竹まで切らるる竹ふ入の短さうの留りも
祝ちう既はお阿孫の家の竹まで花筒二十筒切
せう一豊粟のふを入るとなにして千餘の祝さう
時古こと傲て竹花筒を切あさうそい今さふ筒
の並ふ筒まで二筒を切らると古書に圖寸法ま
あしうとさう又其及さう宗尾此の傲て訂
の並ふ筒まで二筒を切らると古書に圖寸法ま

此時代はさう名刺のさうさ此筒をさう
及利は横は意を成てとの二重切のふを作らう
さう垂るふい箱のさう入董短さう花筒入るふ
て初めうせさうさうさうさ持の一重切のさ
天正四年九月二十一日宗易判と徳よてさう
源真の位友何素清く所をせうたは短く此年次
さう長公安土様を籠るさうちれは未利はさ
出先さう初めさうさう竹ふ筒の合帳とさう
此筒のさう限考て物事さうさう潤を考て
るはさうや利は竹ふ筒の短さうと思はれ

事古終を見出し是に我善不肖と云
 べらうは左有い截と有り故に破て三おけ件
 を取寄く六箇を切一重に傍て能出来くあり
 ちうに思のふ公の思言はふ叶あく法機姫阿
 くて庭へと投擲あるは尺八を奪りて是に大は
 之に入一從一重の思くかゝる法秘苑とわらう
 利休死罪の時法思の事うは破擲くわをもと
 井宗久をそのう一取寄て掃台秘苑以後住吉や
 宗無所持もた及伊丹宗不所持と行るは破ハ
 遺終て留秘苑以とあるは其実なるはや先よ也

著一重切を唯ききハハ先よ依て自中よ投入の
 のら思のちるに及世不家者派の輪よふをわつ替
 ふを嬉しうしきよしたれはあて遠くや又一重
 切を獅子口と唱ハ古き名、遊以名付る系何れ見
 之切一又一節切の秘苑宗尾は有り古きを奪
 て素尚と云利休逆竹を引て尺八の秘苑も
 有るを之此類を百度切或ハ寸度切といふは百
 度切といふるく切のさむら寸度切といふは其の
 ちけを反して切のさむら
 上四の取小田宗隆中よ竹を寸度切して槍と

たきし及不筒として流枕と記しあしとせき水
及不筒の仕入通して宗古とせし

又二重切の内を金梨地として金粉にてまき流枕の
符後して利休物敷きにて政所様へ献上せしや
之を長と云二重切の括ちるふ入は内金梨地として
糸の糸の皮の糸又金粉にて柳桃水と亀ちり符
括ちたる有箱へ相して溜塗し銀粉にて利休作
政所様へ献上し久須見誅安の糸舟有糸敷のつ
何糸不括ちられぬと見えしちり彼燕山糸にてい
まきしちり糸を回括ちり括ちられぬ周は糸とぬ

又銀粉にて登り下りの糸を前括ちたるは宗古
の好なり

之古織利休は逆糸の尺八を面白き事とせしめて
や折しよれたい一重切ちり糸と逆竹の切しとせし
予も一重糸をよむと度も尺つり折し利休は逆糸と
引しは自然のちり糸はいつり折し彼糸の好なり
古織の一重糸を逆糸の切し求むると有るはあはれ
も有るなり花敷若流は糸必糸の吉函有とせし
よ切しは吉逆糸の切し函とせしむ及人の殺しと云
おしは逆糸の糸と反しは糸は自然のちり糸は

予も之ハ百重好也... 入る... 古くを... 思や...

或より... 以後... 今... 大分... 蓮上...

佛本圖... 或... 又云... 行...

けしきせきおのりておのりておのりておのりておのりて
 数奇とておのりておのりておのりておのりておのりて
 おのりておのりておのりておのりておのりておのりて
 体と数奇の道の程をいふは世何人のいふ
 如しや釘釘をいふや内よりうらうらう有深き
 と同くおのりておのりておのりておのりておのりて
 いふおのりておのりておのりておのりておのりて

宗旦或時園地をもて掛て投ふして樂をいふ
 折も友来て宗旦有るふ入より漏てあやめをいふ
 又て折も告ぐれ宗旦云水漏漏ぬをいふ

こゝ道辞は似ておのりておのりておのりておのりて
 唐なりやうて誤有るも宗旦有るも宗旦有るも

宗旦竹を舳のふ入を作ぬ

鳴平利休道あるて及此程こそその唐一体のま
 して終て任はてし又一案法の特敷きいふ
 余多端の概向るは是有るも茶の最第一
 以るまのまをいふは概有るも概有るも
 之終極しう想哉

宗旦家大井川の丸を舳を又て異風の舳のふ入
 を切出きぬいふは母なり

孫村庸軒物教喜よそ刺休の一重切の姿よそ後の釘
もく度く明て並角と形して縁衣と詠しつゝも後よそ
後同様の意も作しし宗

此花角の物く形して今よ庸軒の家箱の人形持
きり意の並角の如く千家よ原史宗を引如くや
くの宗匠の又徴よそ他の作されしよそ昇えて用
百妻おれしけ並角を庸軒角と云う
ふぬ子揃そのを布にて作てふの切端と云ふハ宗
旦や庸軒も此條よそ竹の皮もしつゝしつゝハ
法て様し

嗚呼有幼少の時花の入如く又宗匠一重切を作て銘
を伏義と号

物の致ハ形なりなるを此の致を見たりたも物事と
趣き趣結と云ふ事多し何れよ付ても有り度も其
を又雅と云

ぬら舟尺八の置角切しつゝも
おほ縁と云ふも並角と云ふも
宗旦や箱の二重を切如くは

信しつゝあつて一入柄し時の人教て乞食宗旦
宗和しつゝもその居の箱致もこれ

仙史抄数奇にくす論の二章の終りてよは九意を
明て意の二章にきり

抱馬の巻に叙して予白

宗と直竹の一章切を予白と名有り

宗尾くことを言ふて之に利休く尺八と詠せしに

宗一たる来へて世人もく酢肴とらけりて曲

もたきき事や

仙史異風の切紙を抄取きて良肴と号

大徳の巻一入也

享保時代の紀伊侯の法抄数奇にて外の根を逆と並

て稲塚と号し

この宗史の序をれ世に宗史の抄数奇と号す

後ち宗

川上ふ白物数奇ふて其巻の二章のちて下の意を抄

取て其巻の終りて其巻の終りて

大に梅系を抄取て其巻の終りて

仙史螺の浪の綱を掛く約ふ入る巻を以て其巻

結構を以てして其巻の終りて其巻の終りて

其巻の終りて其巻の終りて其巻の終りて

其巻の終りて其巻の終りて其巻の終りて

多々度の思ぢれいやう

槐記は落板の多見とて花入のふ傾板の板板や
と著しむるまのこにいふ有る不籠毒の思ぢ板板の
多々度の略といふ善思ぢ板板の板板を思ぢて
ふれりな板板をいふ此一章うてもきあふる業力
を押しこむふまやう

依之皆不于有る板板の濃雜多うて拭て並に花入を並
ら板のふまやう

在津の耐信盛の子波河身正休や業のそ若川宗
仁の門人ちり故にふ跡は教潔一概にいふ板板

くは暑業の時はふ板板のそ業の板板の板板
縁てよう

花の生漏の利休板板まや板板

竹の生漏板板の生漏有る板板の板板の板板
まやれよの時は板板の板板の板板の板板
二ま切のま切のま切のま切のま切のま切

豊長殿下西園法退治法障陣の法船艦を見きん少
海峯へ出り利休供有板板の板板の板板の板板
て船より上り哲宗話有次もよ云近年の強乱よま板
まま板板の板板の板板の板板の板板の板板

同報智云彼花入一私累世秘藏方れに不持を
 利休云さあ、いさふ入して一後吞く先へ論して其に
 阿まことおろ報智云さく清供のりて口通し若くは
 言付の流形ささく一隣の禅院を待言く一活字の
 一役で誓体息ありて及ぶ家よ近く茶の湯き彼ふ入
 を床に備置ぬ利休一覽してとてもに花を入りしや
 云々れ報智云ゆき我京匠のふきをさく一折言き
 是非此の花の咲あれも此ふ入よめりて報智云利休云
 古昔珠光報智云といふ花を昔紫雲ふよてまにさ
 しま入らん持く本れとて床さうよ余りて夢をいさひ

其風情まきてうたきかろくこれ人ま利休海きや
 報智云一としてその節の茶付無難云一と貴院さう

天正十年の事なり報智未壯年にして尾崎に
 行して九年九脚と云て活造さう一時兼一と早
 く別髪して報智と云ふれを彼家よりぬく
 之歳より報智利休を同伴し一赤家より帰ると
 中永の船中なれと活せしりまきや中永を改彼
 口花入をさく一並折言きふを喜さう一利休は
 久れに本文の報きて紙で活造まきて誓体云々と
 らんと茶園をさく一と幸非此のふ咲くを又

件て是を八巻一と自取て扱しつや事又と此類
 を見るとん中文の叙文和を録類有或事の従
 事更の述一と云人首の何の時をふたの類亦類
 古も録言として茶の向たをとしてその叙何類以
 たり古を云ふは所よりされの僅は備く由今も類
 茶のて点一を言を以ても非茶の向といふは
 一きたれは茶の向は由て言事更非とも不云
 こと上り師友の事ははく何ふ於るより事
 明らり何れも有る類事更現類として一時利
 休軍中の候事之更非より言一偶め形を言

何事年々此類の言と持量は依程多き一は云
 しくも書と備てもなき類は日数を重なり近
 帰一はよぬ類候有ははとやとて情も一や
 非より非礼とも有一利便此ふを入一よりの
 名なり是ら一持量集又作泉、絶交部事出
 多し利休の時一取ての作さとも濃う人そ此
 ころを紹智系に未ふ徹鍊ちり一時の事、昔の
 殊光紹臨ちり一そ花のまは糸をい入られ
 くと有をい紹紹智に後京於西内院下と受
 下止所は行と友お廣新回断とて有る。追く

ふまひく正月の初一茶の湯き初仲いよ茶座
て及入床より予り兼て始一祝始と云ふ入を掛て
花所をせしむ又云は作し無き

又或医師鷹司殿下入常は信を或時二重初の家司
を法和をにしく法銘を付て下下及及下の信よ
る先直てのふ入いめ夕まきて茶を伴さや信あり
くれい畏て茶をききて初坐床よ一休和尙の画障
紙掛おを掛くし殿下るわと思はるや何れは掛扱
もたしく初坐漸て後座の才行る茶頃の二重切の
あを流て掛置る茶の前よゆゆをききて袋入の

茶を流して下法入坐の及後座よりいふ入の
法後をより上法魁の法後を流して茶をききて
花二種細く持出くし及下信一茶よふ二種有い
いおも入る方も入るは信有てふ一様を下げ
入信て扱をみる残一様を入るはよふ入信の
よふ信を入るは信は茶の茶を信よ信免と思入
てよとれ茶を信入一様のおを信よ信よ信よ
よ茶座二重初と云ふも二種有いといふおも入る
いおも茶を信よ信よ信よの信よとらよとらよとら
く思入茶座と云ふおも入る茶座を信入

こころを大槪をさして何ふ水の邊に結ぶらんを
古銅の花器より古水を入るる善新水を入るる汗かきて
一きこちり

何れも水のかきこむるは何れも水のかきこむるは
名物の水入りの水筒より何れも水のかきこむるは
入るるれぬ水入るる

六のくさ入るる賞観のくさり
廣口のくさを十文字のくさを利休法師のくさを
後を待ててくさり

佐之宮のくさの花入るるをくさり

何れも水のかきこむるは何れも水のかきこむるは

いづれも水のかきこむるは何れも水のかきこむるは
と水入るるくさを早下くさり
何れも水のかきこむるは何れも水のかきこむるは
か

織田貞直のくさは何れも水のかきこむるは
後葉内なるくさは何れも水のかきこむるは
と水入るるくさを早下くさり
何れも水のかきこむるは何れも水のかきこむるは
入るるくさを早下くさり

たしとれる支を掃除して又改めて進入しと也

此必入の何の花入やふ知もは極重中の事好もいん
その分年や時取てわる保今も好有ら支あはれ
何れ念うとまをこの入あり

義政公貞徳の花籠をえて始て籠の花入を用と也
籠ふ入いあはて不潔とさうむいゆゆれ水にて
清らら・清ららり

利休一二年籠のふ入を茶室より一室いん籠のふ入を
尋て償を法一器おて茶室出きり利休えて是の二
は落て進き事と叱し也

針は應るれ糸ちれい形も法に籠替といもれは
又と氣籠有人うては身二様門の落寫支執向も有
人うしも好わる談多し時の宗匠朝鮮産傳の水
指と出せ人いお見儀をもはらふ世の悪徳は押
梅をりて償を要すおとあけしと也

古昔の盆花入のとりうとと盆盆とあり掛ふ入ぬまうと我
ぬと垂撥をぬて

中を懸心とたふいせかをいまつ一喜とれぬまを
まふも本てやう・お後し入しとあり

たしとれる一及せぬ人・花入籠の行とよ下由申し

子孫は仕さるゝ何れ後世の人より小賢の母也

古昔より鏡のふ入も唐板を愛用せしと或時古田織部
利休を招及入り唐床を築ふ入を由り置て木蓮花を
入るるをみるては或ちて極く出あつたり是は古田子に
中と或極して是及び鏡のふ入も唐板を愛用せしなり

古田生涯最第一の作事やと稱せしは倣て是を
人の美を現自れを改革の吾ちる古人の情を仰
この見事よ人事は純叶と云

宗和云ふく一のふ入も唐板を愛用せしなり
其をわたり極をかたまりし不友

宗和云休い並花入も不為しなり

いふ物事や竹のふ入の監繕を不細しなり
又深物と有年やふ知

桃底の花入の唐上りも有一文字は魚舟並有彫り
ちりと故のまゝも善なり彫物は陰陽の別有陽を善し
古田名物のふ入してせしは又も必ね根田魚
けきも地ちり彫りものを雷紋と云

古田細口は宗和物かきして小丸板を取らるなり
能く取合て面白く極きれは其の矢筈板は是れと
いふてらんゆ

任者の後、旅僧瓢箪を以て、金を以て、利休に、
瓢箪を以て、旅僧易事にて、酒を以て、利休に、
明教必兼食、の述と、約し、聖教、主瓢、のふを、入て、金と、振
舞て、布施、として、黄金一枚を、贈る、僧、待て、て、受、謝、す、り
き、し、し、及、瓢を、顔回、と、銘を、今、西園、と、有、と、云

或、き、し、明、徳、志、の、水、筒、を、利、休、途、中、に、て、取、
り、て、ふ、入、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
能、正、明、き、し、

或、人、之、利、休、瓢、箪、の、ふ、入、を、顔、回、と、銘、を、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
改、と、す、本、文、は、依、て、也、と、た、も、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、

は、利、休、と、銘、を、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
宗、旦、瓢、の、ふ、入、を、顔、回、と、銘、を、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
か、ら、し、
顔、回、の、ふ、入、を、し、

宗旦瓢のふ入を顔回

か、ら、し、

顔回のふ入を

見くわく瓢箪のふ入とてはさへ違ふ又顔回といふ
利休の流例もふ知もあまの月流もちびりや
あまの月のまよてあまはち

或人書瓢箪を二ツ切て花入とて一曲物と銘せ
い面白く彼利休の選き一物又よまや

又瓢箪のふ入いやく魚の炭取をゆい時ハ不利とまり
ふ暑中ハ不利と善吃吭湯扱て悪一杖の末風がの
名付くく出して是

或時藤井何素口切の即俄く茶を侍るを和
小舟波の次の百あくも回堂の百はてさく魚の

向は付書院有一休和書の一物物を和ま度は掛金
を茶を和作て茶斗ハ大徳の九共就て何や
いつてもぬく一を和らに和製まありやと
小後そとて茶の向の付書院のよて和は和
く仁清焼のぐんのか袋とて茶入は心を投和
和の曲も和は茶市の茶入て流茶とて和無
て向一と

鉄茶宗納方へ和臨不于尚宗也利休とて人茶は和一
道とて和臨ふ入を又とぬる和茶人と思く和道の家
よとあま和立和早和和は和度とて和和夕方に

出く利休の張をきく候まゝく時を依てい利休の張より掛る
ちりあまれ此物数ある利休を世にて見せしむる凡同く
なりしなりし利休の向ふは遠くても事こそおろし

南坊録宝不敬衆のあまきよあつははは屢不偶
を暮るすれ各ちり時たれいよおろしめ事有つ
承りしなりし利休利休といふと目こちりいし
の奥かきしなりし吹毛の銘録叶て面白く啓首坐れ
録し又むろしおめ事本を彼大河内古田を評
せし金きりあゆみいんめ事賢く長とれしは本文
みこも茶の極きこといしせしり宣意物いしなり

られしなりし候もた有る茶いせしり有害相と集り人そ必不
偶をきの見張る形十分にはおちりし又も録を以
候る録向もの有る

真底記の遊舟の相供として古網の入り口後きより土は
入り口の度たのりし利休やと茶きり

真底記の光廣卿の若や本又信をふたりて時や
或時利休は古法の習はふ入り新未達とて大工は釘を
持善なりとて上下良久変り睡居てこそ一の歩といふ
大工も中の上の二に分け目を廻り見せし候と茶きり
金りしなりし候て彼中のみし釘を指しれいしなり

物有まこと善導也於茲いふまはあやうく糟粕を
 嘗あふ人の一事ふ叶行二をに子叶行やく告ぐ人の
 ち於に油くかす物を能て官事官也こい事終り
 能著程に投きん累を文の能処の説をの考能探
 てせいよか一し於茲も人々の執事の現を文の事豈
 古をまことふ回して今の理尤を思はれまとい分明如
 振い能再依彼趙公云同いけりれ取し終て退と
 いまもをやむ能約よして可き古法の行も必
 少く見よいほくし何れもかすまはあやうくにてそ
 凡を述るるもや能い累入をも其指の前のまはあやうく

凡人への此知いまち指をまはあやうく口傳を秘すまはあ
 之程の事よい者それら箇々此教をまはあやうくまはあ
 有いまを凡といふもはあやうくまはあやうく大あはあ
 を尚とるまはあやうく

床の落掛の釘内へおはる家を宗旦又て何とく擽こ
 ち程まで不面のまはあやうく

殊光の及の人の物敷まはあやうく内まはあやうくや何まはあ
 まはあやうくも能程の次落掛の内まはあやうく宗旦のま
 も背まはあやうくまはあやうく能叶まはあやうくまはあ
 古風まはあやうく能考はあやうく宗旦もたまはあやうく又陰

には内まゝにせしむる利休にて終る事愛苦の心有
 らざる事との事も利休ちちと語るもす理よは形終
 探されし支那の事とて家且ちも事明なり
 又隠の事を專の端に訂ありせしむるを柳訂と云
 是ハ利休所持の高森岡を録しむる訂也
 之座のふ入掛の訂利休多くある事と云古回を
 身亦善と利休くことを角
 又言尚好の小室安京北野は省望月亭と云亭
 赤月中極也と有の録も兼抄事とて信らるは
 小室安を郡山大守控しと建武時此小室安は

て兼話の因は君云座の落し掛の訂亦にあり
 こと六を安める事巨細もて其抄也との録も云
 其抄例は多し古事をもておせし事一たれは
 既上客の段と好む事以惱し先師の事も金
 替しむるに有る事人ちれを時よ叶と有る事
 してて事もよふ叶と好む事速に取せ給ての事と
 あり

福崎左衛門右衛門正則京にて茶を催し近衛應山公を招
 請以時を待言しと有る事後免有に既は今も有る事
 近き可也と云ふ事脚の案を録後たり法お伴滋野井

冬晴新雪にいひ年暮るに彼脚の菓は掛りけい掃
除人の手討はまじぬらんよ使やとてしにまじり正別法
はまじりて始の菓は掛り顔色已は愈怒状の時よ為下
の作し梅より蛇の下り来て漸く菓を認たををも面白
く慰しよまをよ出て誓の無を破り残志也との法よ
正別畏て顔色和ら能有るそと法清り上却て入無少
たよりり

若志の重云或株をとり梅を當意即妙凡愚の
ふたそや帯の法麻はふ店に率よめ取願は制り
ふかふへい島舟法見得の和款の率云之酒通

以和晋謝辭きも同類うて感は有餘此まき

もに人の恥と事い目前ちり自慎徳の考

安永二年八月十五日の晩系よ又言南宗室係利休事よて
飯後の菓を僧客とて井上宗惠法也未種系難云
節をよ四万とてし一障子をたし一巻のよて忘くこ
ろようし一菓子に指飯焼て菓をよしし中記よと梅
法向の法名よ手す難知を有て入聖以法と菓のよ良
成りれとも鳩まれく彼板音に大重焼餅を並光
取てもおもまらうに梅し入無ふ難薄菓もよ法とて
初月頃て席中果難ふ一方覚るし時十四の嘩喧法を折

よ一物ころや此二考のころ

未敷も頗る去来也、對細抄そ月夜ころる座の
面も一入の無家な堪る趣もつ是別名月のころと云
る、古昔ころめ新報もふな何れ目もさる趣も
て有、こころ後とも法家もこれ、又き勢難難
趣もさる人、ゆゑる、

土屋お様も改直と林峯頃を、東に折、因は客振相、成
らねる、去来もころる、お物もさる、ホも出料理の、お物もさる、
目を、さる、ゆゑ、ころ、おも、恐る、無、東、又、ふ、悔、れ、
座、安、客、振、て、流、不、上、客、の、教、も、志、難、有、と、さ、る、ま、も、悦

あ一里松本見体話、方て、客振を感さ、ころ

近衛殿下御簾中尾、客家、ころ、法入、ま、定、て、法、結、納、の
時、読、ち、文、何、来、る、客、一、ころ、折、の、客、振、の、美、く、姿
は、同、ころ、す、

堀田か賀身、正陳、依、之間、お、監、ま、向、善、客、と、さ、文、の、評、未、也、後
ら、善、客、の、ころ、ん、客、て、云、客、振、の、善、い、味、東、の、向、の、上、も、お、ま、い、
誰、と、ころ、ん、お、た、ま、い、澤、菴、か、い、善、客、と、ころ、る、也、

正陳、正、徳、の、事、ころ、法、客、振、の、善、い、東、の、ころ、ま、い、
望、ころ、つ、是、と、ころ、一、概、い、難、事、之、世、依、の、後、ま、公、儀、社
旅、人、と、ころ、ま、い、善、客、振、の、お、り、也、 明和の、以、平、野、何、来

と云く公儀善くして、是も亦、一入ちうけ、
主格よあて、送方、

利休之何方にも有客、一炭花を、
此の、二つ有、一、茶、
ちやの、

吉田の、
上も、
文、
る、

及人、
之、
寔、
作、
を、

織田、
其、

て帰らぬ見体も供してこそ捨子又成りしうまは由來多由
その彼茶碗ありしは是こそ其の茶の湯也

防が真置の子にして茶の湯りも厚うし彼季札

古事目録にして或るに云

寛政十一年豊臣殿下の二百年の法と云ふ當り時教内

紹智追福の事と云へば衆人あしき言をいふ

いふ者よその名蹟の意もや不特きくおれん女

時の趣を以て秀吉公の室一侍を以てまを下さ

客よ出せし世こそ信と彼もさうち成りし一更し

め形もいふ客人の佛堂とて燈籠持やしつらん彼自

名家の許やうし利休をさうし子のころに

秀吉を可恨と却て是をさうし追福をたしめぬ

何やうしその追福を主人とて高の礼多か

或る僧居相をさうしおて云茶よおいて挨拶の以才一物一致

の理を以てさうし炉中おし五行備る木縁火の下や土壇

金の釜水の湯やとさうし和尙云能く茶を付しう終りも是理

をたしし此も終りも茶の湯の意も明し知しし

しうし其後して茶碗の真流をさうし

和尙も形跡をさうしおしおしおしおしおし

はと終りし其時の掛物の説を以て終りし

多行して業縁を眼せしむる素より来りてこれ
多縁の役する家のふれ有財をたたくは考
一と業の首て後味りし相する事は授きし
或人朱子学より業の宗和流を學べて性理の手
より少業縁の因より彼五行配書官秘事なるが
言より一後言をちりしと許し授きのつれを
後一と少少の時よりまじりて入るは有と其は
その是より故にちんそ業の人のさ業を待て五行縁
一のを自然にちり縁れしと古昔よりとよむ
後れは彼士子をちりて笑て業を嘆せし

土化二三自云武了生れて中略と武府は勢なり
と思ふ世を後流東は後通しの中は知りし名利を
能く授かる人
一癖は月花徳を以て羅喉つこくは流業一板
かゝ後して吾世界とそくは
鳴る手は後る標の人見ると有縁時向しとふ友
らん少少業を称嘆して止ぬ
或人の身は女よふ入る心あり他人なるは富も人も交
も法も業人の一法なりとありし
大なる業の命の徳も人の徳もありし

難事云々今世後世一いつて其母斗起りきさやうを
 ち其性根ちくちやわれい續事きもいし難け孫の
 程ちりきか可る昔成信の間言云茶をも茶同業を
 兼度四も其言とありて思ふも思ふてい人の
 ねいりて思ふ人ちるも茶を言てとるいけい

其茶種一味と茶と表し新味おうかち
 ぬれいほ種種もあち人そのよき又依てあ
 紀銘正八十有糸歳の辰東山忌崎隠居して其
 又その庵子位官とて表きい実むよか
 数茶は妙い世とて推直地を人とて用よまらねり

数茶志のよいしる程自然と昇進して茶と人
 いあちり

能阿弥茶屋一俵の茶式を再し一始に数茶の
 二言此道の惣称とありてある如のよけい史記茶
 將軍の傳中の子を執ちや茶友の茶別は其
 時を以て入る一數茶の偶ちりてあか
 又其形すもいもあし一茶の茶の茶
 ちい陸奥の茶よりて人の茶の
 ちうねい平

織物茶葉の海茶葉ありて名をも茶とて推よまらねり

免人為り一保はかく云新しき宗より取はる事の事
ても解るる事にして事にもあれと道の一教吾物と
なりて批向なり不棄悔いなき事其の法を執り
以て其の人の事とせよふれはなり
利休云一生涯は本の教よの教なりと

この自分の宗の事と云ふなり一宗は何れ善教
きいふと云ふなり一時代は何れなり一宗は
ふし一又後世の世の法も其の法と嘆まなり
珠光云お教よの圓悟の墨跡と鶴の一聲なり
いふなり事と云ふなり此の法は自一體なり墨跡と

やうの一声なり花雲ちり

利休云教よの極意は南無松金吾の法と云ふ事
天上下の教よと云ふ事一に依古田智田の教よ
土門の法門の法を云ふ事一に依りての事や

友人の此一軸を云ふ事一に依りての事や
其の用りては其の教示の法なり一に依りての事
其の掛物なり世に云ふ事一に依りての事
一に依りての法を云ふ事一に依りての事
の法を云ふ事一に依りての事一に依りての事
向ての事

依之者將監之いづれ候とて利休の作の茶扱一むを指
度せれ少きや

た有へし申して茶扱を起るる申に言を言
好むる善敷まきとるなり

利休之置の表替を修し諸般を又改のゆつてより海
ぬをもちうや

けしき茶扱こそば茶

利休の程款

茶の湯より善茶普酒一とて改やうかといひ口封
ふしはと茶ゆ茶釜茶巾一柄扱とてあつて茶扱

念古人のきり

おこれのきりきり一人のあつたて

まほしきなりとてかきまはる

利休之小茶扱の紐をの扱を端や

いづれあつらひ宗旦八十に及て紐の足袋を

まきしり利休の漬草の足袋をまきしりゆかを

足袋のふ好まのゆかといふゆかを知らぬ紐の扱

は緒うき一思

おん屋をさし紐の指ををまきし初ら茶扱を
指の扱をまきし人は茶の扱の扱をぬや

くと楽業志流同物をさる用事とて暗くしあしをせん
 殊先教まはれしを取違へし事とて言ひてはるるよか
 ころ痛くおぼしうせん人はお示さんて思ふ人の何の事にて
 ても能く学ばせられ後の世の人とては速くよかる
 あり物の師とて言ひては躰士不半身ハ不厭くよ古
 昔よりお事とて言ひては言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて
 言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて
 の~~~~~とて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて
 言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて
 依てとく言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて

又人の言ひて人の言ひて何物とて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて
 ち~~~~~とて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて

楽業志流同物をさる用事とて暗くしあしをせん

